



開催報告

令和7年12月11日(木)、東京有楽町にある東京国際フォーラム ホールD5で、『～「千」の「地」の「知」～(数多の土地の農に関わる継承知)』をテーマに第10回目となる「田園自然再生活動の集い」を対面とオンライン配信とのハイブリッド方式で開催しました。オンライン視聴も含め、田園自然再生活動に携わる活動団体や行政職員、農業関係者、学生など270名を超える参加者が熱心に耳を傾けました。

1. 主旨

「富士山に“農鳥”(鳥の形をした残雪)が現れたら田植えの準備をする」「サクラが咲いたらタネをまく」といった言い伝えに見られるように、日本では四季の自然の変化を手がかりに農作業の時期を判断し、自然のなかでの農の営みを通じて多くの工夫や知恵を蓄えてきました。

こうした自然観察に基づく知識は「自然暦」として、また農の営みから蓄積された農作業の工夫や知恵は「経験知」や「暗黙知」として、全国各地で多様な形で受け継がれてきました。これらは総じて「農に関わる伝承知」と呼ばれ、地域の暮らしや文化の中で重要な役割を果たしてきました。

しかし、農業や生活の近代化が進む中で、自然環境に左右されにくい画一的な農法が広がり、人々の自然への関心も次第に薄れつつあります。その結果、こうした伝承知も徐々に失われ、私たちの暮らしとは切り離されてしまっている状況もあります。

一方で、近年の田園自然への関心の高まり、農産物の付加価値や品質向上、気候変動への対応さらには先端技術を活用した後継者の育成や農作業の効率化、生産性の向上といった新たなニーズが生まれています。こうした背景のもと、自然のなかでの健全な暮らしや営みの在り方を見つめ直すことへの気運高まりを受け、「農に関わる伝承知」を再評価しようとする動きが見られます。こうした動きは、農業生態系の保全・再生を足掛かりとして、多様な主体が一体となり農業・農村の活性化を目指す「田園自然再生活動」においても、重要な示唆を与えるものと期待されています。

そこで、今年度の「田園自然再生活動の集い」では、全国各地に伝えられてきた農の知恵に着目し、その価値や田園自然再生との親和性について学びます。そして、これからの持続可能な農業や地域づくりの実現に向けたヒントを探っていきます。

2. 開催概要

- ・開催日： 令和7年12月11日（木） 12：30～16：30
- ・開催場所： 東京国際フォーラム ホールD5（対面・WEB配信併用）
（東京都千代田区丸の内3丁目5番1号）
- ・主催： （一社）地域環境資源センター、田園自然再生活動協議会
- ・後援： 農林水産省、環境省
全国農村振興技術連盟、（公社）農業農村工学会
農村計画学会、棚田学会、（一財）日本グラウンドワーク協会
- ・参加人数： 275名
- ・プログラム：
 - (1)主催者挨拶 中村 桂子（田園自然再生活動協議会 会長）
 - (2)来賓挨拶 石川 英一（農林水産省農村振興局整備部 部長）
西村 学（環境省自然環境局自然環境計画課 課長）
 - (3)基調講演 『農に関わる「伝承知」 - 民俗学における農の伝承知と循環型社会を考える - 』
中山 正典（静岡県立農林環境専門職大学 客員教授）
 - (4)活動発表
 - ・『山ざとの農と暮らしは必要か？～「人間の安全保障」としての伝承知～』
三輪 芳和（新潟県・川谷もよりの将来をみんなで考える会）
 - ・『むらの自然や文化をいかす～古瀬の会と葛飾の博物館の交流誌～』
小菅 新一（茨城県・NPO法人古瀬の自然と文化を守る会）
小峰 園子（東京都・葛飾区郷土と天文の博物館）
 - ・『<聞き書き甲子園> 昔と未来をつなぐ～100年前の品種「亀ノ尾」と生きる～』
稲見 華（山形県・山形県立米沢女子短期大学）
 - (5)コメント 中村 桂子（JT生命誌研究館 名誉館長・田園自然再生活動協議会 会長）
 - (6)パネルディスカッション
 - コーディネーター 荘林 幹太郎（総合地球環境学研究所 特任教授（プログラムディレクター））
 - コメンテーター 中山 正典（静岡県立農林環境専門職大学 客員教授）
林田 直樹（地域環境資源センター 理事長）
 - パネリスト 活動発表者
 - (7)閉会挨拶 林田 直樹（地域環境資源センター 理事長）

3. プログラム内容

■ 開会

田園自然再生活動協議会長の中村桂子より主催者代表挨拶、その後、農林水産省の石川整備部長と環境省自然環境計画課の西村課長からご挨拶をいただきました。石川部長からは、農林水産業と自然環境のつながりは、農林水産業を持続可能なものにするとともに、農山漁村の文化や景観を形作り、地域経済の発展や健康的でゆとりある豊かな生活の基盤となっていること、また、昨今の食料・農業・農村をめぐる諸情勢の変化に対応し、食料・農業・農村基本法を制定以来初めて改正し、環境と調和のとれた食料システムの確立を基本理念として位置付けたことや、基本法の施策の方向性を具体化するために、新たな「食料・農業・農村基本計画」を策定したことなど、農水省で進める政策の取組状況についてご紹介をいただきました。西村課長からは、気候変動の深刻化や環境の急激な変化を前に自然を読み解き、土地の特性を生かすこうした知恵は、地域づくりを考える上で不可欠な視点であるという、今回のテーマについて述べられ、さらに2030年までに生物多様性の損失を食い止め、回復軌道にのせるネイチャーポジティブの実現に向けて、陸と海の30%以上を保全する30by30目標を掲げ、目標達成に向けて、「自然共生サイト」として認定する仕組み開始したことや、これらの活動をさらに促進するため、地域生物多様性増進法を制定したことなど、環境省が進めて

いる政策や取組についてお話しをいただきました。



田園自然再生活動協議会
会長 中村 桂子 氏



農林水産省農村振興局
整備部長 石川 英一 氏



環境省自然環境局
自然環境計画課長 西村 学 氏

■ 講演

『農に関わる「伝承知」—民俗学における農の伝承知と循環型社会を考える—』

静岡県立農林環境専門職大学 客員教授 中山 正典 氏

中山氏は静岡県のご出身。日本民俗学、人文地理学がご専門で、フィールドワークを中心に各地の農業用水における水利慣行や民俗について研究をされています。

今回中山氏は、これまでの各地フィールドワークで得られた知見をもとに「農の伝承知」と「循環型社会」（日本の里地里山の伝承母体）について、ご自身が関心を寄せられている「風」、「富士山」、「農業用水」を題材に「民俗学」の観点からご講演いただきました。

「風と環境の民俗」から、日本古来の「風」と暮らしとの深い関わりについて、また、「富士山」の麓に広がる里山の伝承知とそこに暮らす人々の物語、さらに「農と水の民俗」から、各地に伝わる人神信仰と「農業用水」の関わりと歴史的価値について、日本人特有の感性を頼りに「民俗」という視点で示唆に富むお話をいただきました。

農業や漁業など、「生業」を介在して我々日本人が大切にしてきた自然と人間の関係性、そして脈々と受け継がれてきた「循環型社会」の英知を再認識し、これからの社会の「継承知」として活かしていくことの重要性についてお示しいただき、ご講演を締めくくられました。



静岡県立農林環境専門職大学
客員教授
中山 正典 氏

■ 活動発表

3組のパネリストに各地域での活動をご紹介いただきました。

【活動発表①】『山ざとの農と暮らしは必要か?～「人間の安全保障」としての伝承知～』

川谷もよりの将来をみんなで考える会 三輪 芳和 氏

新潟県上越市の吉川区川谷地区での活動報告。

「人間は基本的に都市だけに住んだ方がいいのではないか」という知人の核心を突いた問いかけから始まり、「人間の安全保障」という観点から山里の農と暮らしを考えていく示唆に富む活動報告をいただきました。山里と都市は対立するものではなく、相互依存しているもので、農地や棚田を維持管理することは、下流域を含めた流域全体の防災に貢献し、食料や薪などエネルギーの安定供給を支え、山里だけでなく都市を含めた人間の安全保障につながっているのではないかと述べられました。農村や棚田の先人から受け継がれてきた知恵を大切にすること、都市住民も含めたこれら価値共有の重要性とこれからの可能性についてお話いただきました。



川谷もよりの将来をみんなで
考える会
三輪 芳和 氏

【活動発表②】『むらの自然や文化をいかす～古瀬の会と葛飾の博物館の交流誌～』

NPO 法人古瀬の自然と文化を守る会 小菅 新一 氏

葛飾区郷土と天文の博物館 小峰 園子 氏

茨城県つくばみらい市(旧谷和原村)と東京都葛飾区での活動報告。

昭和40年代まで残されていた農村の環境と文化を復元し、後世に伝えていくことを目的に、古瀬の会と葛飾区の博物館が連携・協力して実施している取組についてお二人で発表いただきました。古瀬の会では、地域の自然や文化を農業という生業の中で守り伝えることを実践されてきました。昭和30年代までは博物館のある葛飾区は大きな川に挟まれた低湿地帯の農村で、古瀬の会と環境が似ている「地」のご縁があったそうです。古瀬の会では、後継者も育ってきており、農村環境を守り継承することを実践する場所として今後も楽しく活動を続けていきたいと期待を込めた言葉をいただきました。また、葛飾区では昔の農村環境を古瀬の会で体験することができ、それを都市住民にしっかりと伝えて、これからも連携をとって活動していきたいと展望を述べられました。



NPO法人古瀬の自然と文化を守る会
小菅 新一 氏
葛飾区郷土と天文の博物館
小峰 園子 氏

**【活動発表③】『<聞き書き甲子園> 昔と未来をつなぐ～100年前の品種「亀ノ尾」と生きる～』
山形県立米沢女子短期大学 稲見 華 氏**

「聞き書き甲子園」をきっかけに訪れた山形県庄内町での活動報告。

山形県庄内町のお米の品種「亀ノ尾」について聞き書きしたことを発表していただきました。

「亀ノ尾」というお米の品種の特徴や米づくり名人阿部さんの紹介、そして「亀ノ尾」を育てるポイントと苦労についてご紹介いただきました。聞き書きをとおして、伝統を守ることの大切さや難しさ、農業にまつわる社会問題について、より身近に感じ、考える貴重な機会になったと報告されました。さらに、協力すること、そして謙虚でいることの大変さ、これから仕事をしていく上での考え方や意味など、名人の言葉から得た気づきや学びについて丁寧に発表していただきました。



山形県立米沢女子短期大学
稲見 華 氏

■コメント

J T生命誌研究館の名誉館長でもいらっしゃる中村氏より先にコメントをいただきました。

「伝承知」は世代を超えてつないでいくもので、人間の持っている力でそれぞれをつなげようとしており、その際に中山先生が着目されていた「風」のような「身体性」がとても重要だと強調さ

れました。そして、「人間は生きもので、食べていかなきゃいけない。それを支える人間がいて、そこに伝承知がある。」と述べられ、多様性はバラバラだと分断になってしまうが、そこで「命」ということを考えながら活動することが大切で、つながるベースになっているとコメントされました。

また、中村氏は印象的だった言葉として「謙虚さ」を取り上げ、「謙虚さはこれからの時代を考えると大事なキーワードであり、リーダーに必要なものではないか」と述べられました。「こういう活動をしていれば、自ずと謙虚さというものが身につくと感じます。そういう意味でも、地域を支えることであると同時に、本当の未来を考え、リードしていく力は、こういう活動から出てくるというのを強く感じました」と、田園自然再生活動の今後に熱い期待の言葉を寄せていただきました。



■パネルディスカッション

- ・コーディネーター： 萩林 幹太郎（総合地球環境学研究所 特任教授（プログラムディレクター））
- ・コメンテーター： 中山 正典（静岡県立農林環境専門職大学 客員教授）
林田 直樹（地域環境資源センター 理事長）
- ・パネリスト： 三輪 芳和（川谷もよりの将来をみんなで考える会）
小菅 新一（NPO 法人古瀬の自然と文化を守る会）
小峰 園子（葛飾区郷土と天文の博物館）
稲見 華（山形県立米沢女子短期大学）

パネルディスカッションは、総合地球環境学研究所の萩林特任教授をコーディネーターとして進められました。今回のテーマ『～「千」の「地」の「知」～（数多の土地の農に関わる継承知）』という観点から、自然の中での営みや暮らしの在り方、そして地域との関わり方について、それぞれの方々のご自身の経験を交えながら想いやお考えを語ってくださり、地域活動や先人の知恵をつなぎ、継承していくことの意義と今後の展開について議論が交わされました。

まず最初に中山氏からは、「中村会長のお話の中で人間は生きものであるということについて、自身のスタンスをもう一度考え、再確認しなければいけない」とし、「地縁で成り立っている社会の一員として、構成員として何を考え、どう行動していくべきなのか」ご自身の課題としてもパネリストの方々に伺いたいと述べられました。

林田氏からは、民族学を始められた柳田國男先生についてご紹介いただき、「文献資料など表の歴史だけでは本当の生活文化の総体は見えないため、フィールドワークによる民族資料の収集記録が大切だ」と、改めて民族学の重要性について強調されました。また、稲見氏の発表の中で注目され、今回キーワードの一つとなった「謙虚さ」について、「中村先生は多様性だけではダメで分断があってはいけないとおっしゃっていましたが、「謙虚さ」はフレキシビリティをもたらし、フレキシビリティが多様性を受け入れることができる。そのため、リーダーにとって最も必要なことだ」と、米国アスペン研究所の報告からご紹介いただきました。

「伝承知をつないでいくために、活動を続けるために、地縁の住民の人たちとの関わりでどう働きかけるか、どういう考え方ができるのか」、という中山氏からの問いかけに、小菅氏からは、「10年後、20年後に地域から信頼をもらうのにはどうしたらいいか、まず信頼をどういうふうに勝ち取るか常に考えて取り組んできた。そして何よりもみんな楽しんで活動することが大切だ」と、思いを語っていただきました。また、三輪氏からは「集落の中で多様な関わり方を受け入れること

が大切で、そこで楽しかった思い出や記憶を一つでも持ち帰ってもらい、興味を持って関わってもらうことが重要」と、実際の経験を踏まえお話しいただきました。小峰氏は、「博物館は民族学という範疇で、その環境、自然と共に農業のあり方を学ぶところで、博物館で重要視しているのは、農業体験ではなく農村体験だということ。すでに葛飾区ではその環境や自然というものがなくなってしまったところで、この古瀬の会との出会いがあって今まで活動が続いてきているということは、葛飾区の人たちにもある程度の評価をいただいているのではないかと述べられました。

荘林氏は「「楽しさ」がやはりキーワードの一つで、伝承知を伝えるということ自体があるいは伝承知を聞くということ自体が「楽しさ」の源泉の一つではないか。」とコメントされました。

林田氏から三輪氏に対する「贈与交換伝統に根ざした役割や相互扶助に基づく尊厳」という言葉についての質問に対して、

三輪氏は「贈与交換とは、貨幣経済ではない、物々交換みたいなもので、村の方にもお裾分けしますし、そうすることによってお互い元気をもらっているというところもあります。」また、「尊厳とは、国際協力とか開発援助の世界でいう紛争や災害、貧困、疾病から人を守り、食料を供給するだけでは実は不十分で、自分たちの力で人生を選択していく、可能性を広げるような働き方をすることが重要だという意味です。自分たちの力を発揮して、自分の選択で周りの人を助けたり、共同体や社会に貢献したり、助け合うことが重要なのではないかと、それによってその人自身や地域全体が生き活きと生きていけるのではないかとという意味を含めています。」と説明され、自然と人との関係性や活動の根幹に関わる新たな視点を提示いただきました。

荘林氏の「身体性の話とも関わるのかもしれませんが、AI を利用せず、対面で聞くことで得られたものはありましたか」という質問に対して、稲見氏は「AI を使わなかったことで、名人の話の一回聞いただけで終わらずに、もう一回吟味することができたことが良かった点です。」と答え、また、「私が取材した名人さんは、亀の尾を作った方の子孫なので、うちで作らなければいけないという強い使命感を持って作られているという話を直接お聞きして、すごく単純ですけど、つなぐために自分が農業に従事するっていうのは、すごいなって思いました。」と、聞き書きで得た感動を素直に伝えていただきました。

最後に荘林氏から「自然と共生した生業としての農業、林業などの大きな喜びや価値の一つは先ほど皆さんもおっしゃったように、自分自身で自分自身の判断をできること。その裁量度があるというのは、やはり職業として大変大きな価値のあるものだと思身は思います。加えて、自然を相手にするがゆえに、伝承知の価値というのが、常にあると思います。完全に自然をコントロールする産業の場合には、おそらく伝承知というのはどんどん近代技術に置き換えられていくのかもしれませんが、ただ、自然をコントロールしない中での生業というのは、やはり伝承知が極めて重要だと思います。さらに、皆さんのお話から、伝承知を伝える過程で様々な人間同士の関係性というものが出てきて、それが地域の信頼につながり、地域の活性化につながるという側面もあります。伝承知というのは単に生きる上でのその知恵を共有し、世代を超えて伝えることだけではなく、地域自体をも作り上げていくそういう触媒の役割も果たしているのではないかと締めくくられました。

今回のパネルディスカッションでは、自然と人との関わりの中で「伝承知」の意義とつないでいくための新たな可能性について多くの示唆をいただきました。ありがとうございました。



荘林 幹太郎 氏



中山 正典 氏



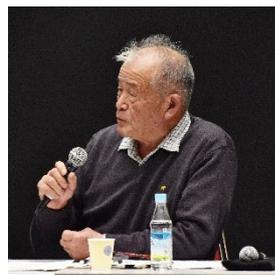
林田 直樹 氏



三輪 芳和 氏



稲見 華 氏



小菅 新一 氏



小峰 園子 氏



■ 閉会

閉会の挨拶 林田 直樹 (地域環境資源センター 理事長)

